## 指導上の注意点

**●二四九ページ**

問 **◎「エノモトさんと同じ状態」（下 11 行目）とは、どういう状態か。**

答 人魚のそばを離れられない。外に出ているときの記憶があまりない。誰としゃべってもおもしろくない。電話にも出ない。つまり、外とのつながりを絶っている状態。

**●二五〇ページ**

問 **「これではいけない」（上 10 行目）とあるが、どのようなことが「いけない」のか。**

答 人魚に没頭して現実世界に適応できなくなってしまうこと。

補 エノモトさんの「このままでは自分はだめになってしまう。」（二四八・上 16）という思いと同じ。

問 **◎「エノモトさん」の「人魚を取りに来た」（下 4 行目）という言葉から、どのようなことが分かるか。**

答 エノモトさんの人魚への執着が弱まり、落ちつきを取り戻したこと。

補 「迎えに来た」ではなく、「取りに来た」という言葉から、人魚が「モノ」に戻っていることが分かる。一週間人魚と離れたことにより、思考を取り戻している。

## 語句の研究

**●二四九ページ**

**下 7 会社に行き家に帰り食事をとり人魚を眺め眠った。** 前後で同様の表現が繰り返され、段々と人魚の記述が増える。「わたし」が人魚に執着し、没頭していく様子。淡々と描かれることにより、「わたし」の生気が失われていくことが強調される。

**●二五〇ページ**

**キー・ポイント　エノモトさんとだけは僅かに喋りたいような気がした。** 外部とのつながりを断って人魚に執着するなかで、エノモトさんとだけはどこかで関わりを求めるのは、二人の同質性や、近すぎず遠からずという距離感からであろう。エノモトさんが「わたし」に相談することにしたからこの物語は始まったのである。またこの記述から、この作品を「わたし」と人魚の物語ではなく、「わたし」とエノモトさんの物語として読むこともできる。

**上 16 インターフォン**　interphone（英語）。玄関と室内、部屋と部屋との通話に用いる私設有線通話装置。

**下 13「海に帰す。」**　二人は「いちばんいいのは人魚を海に帰すことだ」（二四八・上 18）と最初から気付いており、それを実行に移そうとしている。なお、「返す」ではなく「帰す」という表記なのは、人魚が「拾得物」（二四七・上 16）ではなく「ひと」（二四六・上 10）のようであると感じているから。

## 注意する語句

（＊で用例を示した）

**後じさる**…前を向いたまま後ろへさがる。後ずさる。また、ためらってぐずぐずする。

＊猛獣を前に、彼は後じさった。

**てきぱき**…物事の処理や対応など、動作の機敏なさま。言葉や態度が歯切れのよいさま。

＊彼女は隊員にてきぱきと指示を出した。